
中国子授け考

夏 宇 継

この数年来、私は日本の産育習俗について研究を積み重ねてきた。子授けから帯祝い、出産祝い、三日祝い、お七夜、お宮参り、お食い初め、初節句、誕生祝い、七五三等様々な習俗儀式が厳かに行われている。そして、上述の儀式の中で期日の選択、服装の様式、食品の種類などには、すべて特定の決まりがある。歴史の進展、社会の発展にともなって、人々、特に大都市の人々の民俗意識が日に日に淡薄になり、古い習俗が変わりつつある今日、これらの祝事は経済が高度に発達した日本においてどうしてこれほどよく保存されているのだろうか。言い換えれば、このように定式化、規約化されてはいるものの、未成文の決まりが、どうして伝承されているのだろうか。おそらく、日本人はこれらの風俗習慣を日本の伝統文化の要素として大切にしているほか、こうした人生の儀礼を国民が伝統文化の薫陶を受け入れる重要な機会と見なし、文化的な心理や生活の方式を広く伝播し、長く伝承させていく手段としているのだろう。そしてその功績は、より濃厚な民族意識をかき立て、人間関係を強くすることにあるのは確かだ。

中国の大都市では習俗の変貌が激しい。例えば、北京地区の産育習俗にはかつて、子授け、分娩を促進させる「催生」、三日湯洗三（生まれて三日目に産湯を使わせる儀式）、十二日目の祝い、満1か月の祝い、百日祝い、満1歳の誕生祝いなど多くの祝事があったが、現在では伝統的な仕方が殆ど棄て去られ、一般にはわずかに満1か月や満1歳の誕生日を祝うだけで、儀式も

日に日に簡略化するようになってきた。但し、農村部では古い習俗がかなりよく保存されている。

本論文においては主に中国の子授けの習俗を論述し、あわせて日本の子授けの習俗と比較を進めるかたわら、同じアジア文化圏に属する中日両国の歴史的な淵源や交流関係を探求してみたい。同時に、中国の人口増加は依然として厳しい情勢にあり、人口問題の専門家達が「中国は全力をあげて高出産率——低文化水準——低生産性から低出産率——高文化水準——高生産性への転換をはかるべきだ」と声を大にして叫んでいる今日、旧来の出産と密接な関係を持つ子授けの習俗について整理を行うことで、文化と人口の関係を探求するための参考になればと考える。

『史記』孔子世家にある「紇と顔氏の女……尼丘に禱って、孔子を得る」という記載は子授けを願う古い習俗のよい例証と言えよう。この習俗の起源を遡ってみれば、古代の人々の生活における血縁による連帯と家族に対する依存とは不可分だと思われる。子を得ることこそ古代の人々が永遠の生命に対する渴望を満足できる道と見られ、それは明らかに家族と氏族の繁栄にかかわり、後にさらに財産の相続や老人の面倒をみることにもかかわるようになった。そこで、子授け願望は昔から一種の普遍的な社会心理となった。多産の蝗のように子孫が繁栄するという『詩経』周南のしゅうし蠡斯の祝詞に見られる古代の社会心理と出産観念は、後に興った儒家文化に継承され、発展してきた。

中国の歴史を長期に渡って思想面で支配してきた儒家文化は、その最大の特徴を倫理中心主義においている。儒教の文化的構造は集団を基礎とし、家庭を中心とする点において、個人を基礎とする欧米文化と異なる。この伝統文化が人口の変動に与えた影響の主要なものは、多産の奨励、男尊女卑、農民の土地への相対的な定着化であり、これによって自給自足による閉鎖的な状況が導かれた。「不孝には三つあるが、後継のないことが大とされる」という封建的な倫理観念は、長く女性に対する重圧であった。子どものないことが「七出」(かつて夫が妻を離縁してもよいとした七つの理由)の第一条にあ

ったことから、人々の子授けを願う気持ちが如何に切なる物であったかが分かる。太古からの原始信仰及び中国の歴史の流れの中で生まれた儒教文化、仏教文化、道家文化は、すべて子授けの習俗に支配的、或いは重大な影響を与え、子授けの習俗に時代性と多様性を付加してきた。まとめてみれば、大体以下のような類型に分けられる。

(一) 性 崇 拝 型

1. 子授けの陰性崇拝（女性生殖器崇拝と妊娠祈願）

「民はその母を知るが、その父を知らず」のような母系氏族社会の時期において、婦人は単に社会を維持する核心であるだけでなく、生産領域の主体でもあった。彼女たちの従事する生産には二つの意義がある。その一つは生活物資の生産で、もう一つは人類自身の生産、つまり種の繁栄である。人々は単純な思考により、出産は母体単一の働きと表面的、直観的に考えたので、母体の陰性を崇拝し、それを神秘化した上で、石の洞、素焼きの鉢、谷間などのような空間的収容性のある物体或いは窪んだ物すべてを崇拝の対象としていた。こうした習俗が今まで残されてきた地区がある。例えば、内モンゴル地区では、子授けを願う婦人は山の洞を通り抜けなければならない。湖南省常寧県東橋郷にも、岩壁の下に一つの窪んだ洞があり、子授けの洞とされている。子どものない婦人は数十里の遠くからやって来て、そこで線香を点し、紙銭を燃やし、一本の竹竿を洞の中へ挿し入れて上げ下げし、最後に井戸の水を飲んで、子授けを願う。雲南省の劍川石窟の第8窟には、蓮華座の上に女性の生殖器の形をした「阿映白」が彫られている。白族の女性は今でもここに来て子授けを祈願する。江蘇省の興化県では、かめの中へ点した線香を投げて子授けを願う。この方法も陰性崇拝から派生してきたものである。

2. 子授けの陽性崇拜（男性生殖器崇拜と妊娠祈願）

生産力の発展や私有財産の増加に従って、男性は次第に生産の主体となった。その社会における地位や種族繁栄上での不可欠な役割が社会に認識され、承認されるようになると、母系氏族社会の女陰崇拜も父系の象徴とされる男根崇拜に取って代わられ、陽性崇拜の子授けの習俗も発生した。山の峰、石柱、鉄の錨、扉の釘など錘状或いは尖って堅いものは、常にその象徴として崇拜された。例えば湘西の江永県に住む瑶族の祖先の居住地であった千家峒には、「石童子」という石洞があり、洞の入口に一本の高さ30メートルほどの石柱がある。この石柱は妊娠祈願者の群がってくる目標となった。同治年間の『上江両県志』の巻五にも、鍾山書院の後にある御賜堂の表門の外に「二本の鉄の錨がある……婦人達は中秋にこれを撫でると子供が授かる。俗にこれを『摸秋』という」という記載がある。これは『帝京歳時紀勝』に記載された北京の婦人が正陽門（前門）の真中の扉に突出した円い釘を撫でると同じ信念に基づいたものと思われる。巫師の手に持つ神権杖も男根崇拜の一種と考える者もいる。

3. 陰陽の結合による子授け

太古の人々が父母両方の出産における役わりを認識すると、男女の性交を模倣して子授けを願う習俗が現れた。湖南省西部の苗族では儺神に願掛けをする最後の儀礼が子授けを願う内容となっている。シャーマンは象徴的な意味を持つ木槌で陶器の鉢をポカポカたたきながら歌う。歌詞は赤裸々な性交を内容とし、露骨に歌うほど、妊娠祈願がかなえられるという。

さらに湖西の通道県の侗族は、天災に遭い、人口が減少するたびに、必ず縁日を定めて、子授けの願掛けをする。二人が伝説中の侗族の祖先姜郎と姜嬢に扮装する。姜郎は仮面を被り、手に木の棒を持ち、赤や緑の布を着せられた雌の豚の尻を突き刺したりする。縁日に来た人たちも木の棒を持って一緒に豚の尻を突き刺しながら、ドラや太鼓を敲き、性交を内容とした妊娠祈

願の歌を歌ってはしゃぐ。

また、一部分の地区で行われる、子どものない婦人に水をかけるという子授け祈願の習俗も男女性交の模倣形式であるとする学者もいる。

日本にも上述の習俗に類似するものがある。例えば、『日本産育習俗資料集成』には、神奈川県の人々が神社の巨石を抱いて子授けを願う習俗が記載されている。川崎市の老人を調査したときにも同一の習俗を聞いた。これは中国の性崇拜による子授け祈願の習俗に似ている。巨石は性の象徴として生命の宿るものと認識されてきた。大昔、中国の二つの部族が婚姻を結ぶ祭壇の上には、土で積み上げた高い塚があったり、「あるいは神石を設け石祖と称した。ある人はそれが男性生殖器を象徴するものと考え、また女性の乳房を象徴するものとする人もいるが、社壇が最初に生殖の神を祭祀した場所であったことは断定できる²⁾」という論述もある。

人類の自己の繁栄に対する認識の歩みはゆっくりとしたものだったので、これらの習俗は当時の人々の認識能力に制限されたものだったが、人類が後代を繁栄させることを重視したことは確かだ。これは現代人が「オギャー」という朗らかな泣き声に伴って、一つの真新しい生命の誕生を宣告されるのを聞いた時に、心の底から湧いてくる興奮につながってくる。

(二) 原始信仰型

根深い原始信仰は、かなり長期に渡って人々の意識、心理を支配してきた。原始信仰の篤信者の観念の基礎には靈魂不滅、万物有霊の観念があり、天地、太陽、月、山や石、水や草、植物、動物、祖先をすべて霊のある生命体と見なし、神霊として拝んだ。

1. 天体崇拜による子授け祈願

天を畏敬する先祖が、天体の神秘を不可解なものとし、これを崇拜したこ

とからも、いくらかの子授け祈願の習俗が現れてきた。特に輝きが柔和で満ちたり欠けたりする月は、女性の特色が賦与され、女性の守護神と称された。月の光は「死んでも、さらに生き返る」力を有すると言われる³⁾。8月15日の中秋の節句に、婦人は月を拝む習俗があり、ある地方では月の下で集って月の影を追いかける遊びがある。その中に、妊娠祈願が潜在的に含まれている。

中国の民間では、「天上にある星の数ほど、地上に人間がいる」という。夏の夜に、空いっぱいの星に向かって、年寄りによく子どもたちに「地上に一人の子供が生まれると、天上の星が一つ増える。地上で一人が死ぬと、天上に一つの星が消える」と語る。牛郎（牽牛星）と織女が毎年子どもを携えて鵲の橋で会う7月7日に、人々は星を拝んで祭る。子どもの欲しい婦人は「九子星」を拝んで子授けを願う。

2. 動物崇拝による子授け祈願

中国の多くの民族には、麒麟が子どもを乗せてやってくると信じられてきた。麒麟は古代の伝説の中で瑞祥を象徴する動物であり、想像上の動物である。

また、毎年正月15日に、人々が竜の形をした長い張り子の提灯を持って街を練り歩く習俗がある。長年にわたり子どものない者は、竜の提灯が自分の家の前につくと、お礼を贈って、竜を自分の体に巻きつけてもらう。さらに縮めた竜の胴体に男の子一人を乗せ、家の前を一周してもらう。こうすれば、九つの子を生む竜が彼女たちを妊娠させることができると信じられている。これは竜に妊娠を祈願する習俗である。

福建省南部、台湾などの地方では、婚礼の時に、「翻竜娃」（竜の子をころがす）という習俗がある。すなわち、花婿と花嫁は新婚夫婦の寝室に入ると、事前に選んだ聡明活発な男の子（辰年か巳年生まれが最もよい、蛇は俗に小竜という）を新しいベッドにころころと転がせながら、「転がって、転がって、来年に男の子が生まれる」というような歌を歌う。そして花嫁は竜の子

をちょっと抱いてから、花婿に渡す。花婿はお礼の包み⁴⁾を竜の子の手に押し込んでやる。このような婚礼中に行われる子授け祈願も、竜に妊娠祈願をする一形式といえる。

その実、竜は蛇のトーテムを基礎に、また他のトーテムを變形させて加え、最後に形成された総合的な虚構の動物である。蛇は世界の多くの民族で陽性を象徴する動物の一つとされ、夏民族の祖先大禹の「禹」という字の本義が強い生命力を持つ蛇であるという説もある。ある学者の考証によると、竜は魚の変異⁵⁾でもあるという。

魚の繁殖力と多産が古人に注目されて以来、最も早く子授けの習俗に関わる崇拝の対象となったのは魚であった。中国の魚文化は一千万年を経て、あまねく天下に伝わった。そして生殖信仰の象徴として、魚文化は社会集団生活において「教化」の働きをした。新石器時代にすでに始まった魚鳥紋、双魚図と連体魚などは生殖信仰の証と見ることができる。今から7000～6500年前の中国の母系氏族社会時代に属する西安の半坡、臨潼の姜寨などの仰韶文化遺跡から出土した彩陶には、すべて魚紋あるいは変形の魚紋が描かれている。これらの彩陶には、図案化、線状化された各種の変形体の魚以外、さらに「人間を魚に寓す」ような人面魚紋がある。「甘肅の武山の仰韶遺跡で発掘された一つの陶瓶の上に、我々は人面魚身の図形の出現を見いだした」という報告⁶⁾があるが、これは、単純な動物の祖先崇拝を氏族の旗印にするために、すでに原始的な表現を抜け出して、魚を人格化させたことを現わしている。またその一方、魚のトーテム崇拝が、かつて広く太古の民族の中に存在していたことも説明できる。

夏文化に関する報告では「二里頭遺跡の一つの灰の穴から長方形に近い骨片が一つ出土した。骨片の一端はやや狭く、長さ9.8cm、広さ7.1cm、骨片のつやのある面の中ほどに一尾の魚が刻まれている。骨片の片側が後に磨かれたので、魚の頭がすでに擦り消された⁷⁾」と記述されている。これも夏民族が魚神を崇拝した習俗の有力な証拠である。子を授け、吉祥を現し、豊作の兆

しとされ、災禍を逐う魚は、もはや中国の民間でもっとも見なれた瑞祥の飾りになっている。民間では、今日でも「魚戯」(魚芝居)が演じられ、「魚の趣」といった行事がある。例えば正月18日に、広西の苗族は「鬧魚節」(魚で賑わう)という節句を祝う。正月13日から23日まで、陝西の三原県には魚が竜に変わる内容を上演する縁日がある。魚を観る、魚を呼ぶ、魚を釣る、魚を飼う、魚を戦わせるなどは民間の娯楽の習俗の重要な内容になってきた。当然、中国のほか、古代エジプトの西部、アジア、ギリシアなどの民族にも同様な習俗と観念があり、直接魚に子授けを願う習俗は伝承されてかなり久しい。

北京の人々は婚礼の際、花嫁の実家から送ってきた赤いゆで卵を食べる。赤い色はめでたいことを意味し、妊娠は「有喜」(おめでたになる)ともいう。卵を食べることは、鳥がかつて古人に崇拜されたトーテムであったことにかかわっている。『史記』殷本紀には「殷契の母は簡狄と曰う……帝馨の次妃と為る。三人は浴を行い、玄鳥が其の卵を墮したのを見た。簡狄は之を取って呑んだ。これに困り孕んで契を生んだ」という燕卵を呑んでの妊娠にかかわる古い記載がある。

日本の千葉県にも、鶏の初めて生んだ卵を食べると妊娠できるという言い伝えがある。これは明らかに同様な観念に基づいたものである。また長野県にある猫を飼うと妊娠できるという伝承は、今のところ中国の調査ではまだ同様のものは見つかっていない。しかし、中国の唯一の子授けにかかわる男神、張仙の像の足下に、二本の尾のある猫が二匹描かれている⁸⁾。これはどんな伝説によるのか、これから研究しなければならない点である。

3. 植物崇拝による子授け祈願

「花を植える気はあるのに花が咲かない、柳を挿す気はないのに柳が茂っている」という諺がある。中国には、何もしないでもよく根づいて成長する柳の木が随所に見られ、中国の現代文学の巨匠茅盾はこの木のために有名な散

文『白楊礼賛』を書いたことがある。このため満州族の人には楊柳の枝に子授けを願う風習がある。しかし、民間でもっとも多いのは、中が空か、種や実（中国語で子という）の多い植物に対する崇拜である。例えば、ひょうたんなどの瓜類、竹、石榴などの子房類の果実、豆類、棗、栗、落花生などの干した果物はすべて崇拜される。なかんずく、洪水神話とかかわるひょうたん崇拜にはすでに長い歴史があり、その遺風が今でも見られる。中国の南部及びインド、東南アジア、日本の伝説中の英雄あるいは始祖が竹、ひょうたん、かぼちゃなどの中が空の植物や瓜類から誕生したという内容は、東南アジアの一種の固有原始文化に属する⁹⁾。竹に関しては雲南、貴州、四川などの彝族、侗族、苗族の子どものない婦人が山の竹を祭って妊娠祈願をする事例もある。『詩経』大雅の綿にある「綿々^{めん}とつながり絶えぬ瓜^{うりこり}瓞」という詩句は、長い蔓にどっさりぶら下っている大小の瓜が出産にかかわっていることをいきいきと物語っている。瓜は中が空で実が多く、蔓は長くのびて絶えないものなので、子孫の長く栄えていく喩えとして、植物崇拜の気持ちやロマンチックな子授け祈願が託されたこの詩句は何と素晴らしいものであろう。

瓜と子授けの関係に基づいて、瓜を食べて子授けを願うのは当たり前のことだが、どんな瓜を、どんな時に食べればよいかは、地方によって異なっている。

安徽省の蕪湖では、めったにない「真清明」（清明の日がちょうど旧暦の3月3日にかさなる）の日に、子どものない夫婦が煮えたかぼちゃを同時に箸を上げて食べる習俗があり、なるべく全部食べてしまう。これは靈驗あらたかな方法だと言われる。

江西省では、中秋の日に瓜を食べて子授けを願う。

中国の南方には、さらに瓜を盗んだり、瓜を送ったりする習俗がある。その具体的なやり方と時間はまちまちである。

安徽省の揚子江沿岸地方では、中秋の夜に、行列を組んだ子供たちが畑からかぼちゃをとってくる。それに嬰兒の顔を描き新婚の家にする。そのかぼ

ちやを受け取ると、よく男の子を生むと俗に伝えられる。かぼちやを受け取る家は喜んで出迎え、月餅や果物でお返しをする。かぼちやを送る行列は氣勢をあげるために、大勢で松明を持ち、ドラや太鼓を敲きながら進んでいく。氣勢があがればあがるほど、迎える家は喜ぶ。

江蘇省北部の淮安などの地方の瓜を送る日は旧暦正月15日の元宵節以後、2月2日の竜抬頭節以前と定められている。送る対象は子どものない年配の人、あるいは結婚してから長くたっても子どものない者である。

貴州にも、中秋節に瓜を盗むと子どもが授かるという習俗がある。人々は盗んできた冬瓜に彩色で顔を描き、その上に着物を着せ、人間の姿にする。瓜を送るときには、選ばれた年配で福運のある者が瓜を抱き、ドラや花火に伴われて、結婚後数年たっても子どもに恵まれない家に送ってゆく。瓜を受け取る家は盛大な宴席で接待する。その夜は、ベッドに置かれた瓜と一緒に寝、翌日の朝、瓜を煮て食べると、妊娠ができると考えられている。

日本にも、上述の習俗に類似するものがある。例えば、千葉県では多産の家からサツマイモを盗んで食べればよいといわれている。群馬県では、三代の夫婦がすべて健在な三軒の家から、三つのサツマイモをもらって食べると子どもが得られるという習俗がある。これらの発想はサツマイモのような草本植物の多産性とかかわっていると思われる。この俗信の中に「三」という数字が繰り返して現れたのはどういうわけか。中国では「三」が陽性の数とされるが、日本でも類似の考えから男の子を望む心理の現れであろう。

婚礼における子授けの習俗の中でもっとも盛んに行われてきたのは「撒帳」である。この習俗はすでに千年に近い歴史を持っている。『東京夢華録』娶婦には、「男女……床に就く。女は左に向かい、男は右に向かって坐る。婦女は金銭綵菓をちらし投げる。これを『撒帳』という」とある。明清の長編小説や風土記にも「撒帳」が描かれている。新婚夫婦が床とこに坐って交杯酒（固めの杯をかわす）を飲むと、福寿のそろった長者が床側の高いところに立って、果物鉢から干した果物を投げ散らしながら、「散らしものを床とこの中央まで投げ

て、明日に状元郎を生む」というようなめでたい言葉を大声で唱える。地方の南北を問わず、すべて落花生、棗、荔枝、桂圓、蓮の実などの干した果物を用いる。これらの干した果物には同音（花生：代わる代わる生む、男の子を生み、女の子をも生む。棗：早く子を生む。蓮の実：子を続けて生む。栗：子が立つ。桂圓：貴い子を得る……）のめでたい意味があるほか、こういうものには種が多い、あるいは実が多いという性質をも考え合わせており、これは二重の要因に基づいたものと言うべきである。

上述の果物の中で、特に棗が大切にされることもある。『東京夢華録』育子には、「満月に至ると……大いに洗児会を展開する。親類賓客が盛んに集まり、香のある湯の煮えている盆の中に、菓子（干した果物）、綵銭（彩色の線で飾った銭）、葱、蒜などを下ろしておく（盆の中に投げる）。……婦人たちは盆の中で直立している棗を争って取って食べる。男の子を生む徴と思われる」とある。「棗」と「直立」を合わせて見れば、やはり「早立子」という意味になる。

このほか、石榴も子授けにかかわって、めでたいものと思われる。民間年画の「榴開百子図」はその一例である。成熟した石榴の皮の大きな裂け目に赤い種がたくさん現れている様子が描かれているが、新年を祝う絵として、「多産」を祈る意味は言わなくても明らかである。

これらのことは、孔子以前の時代の「綿々とつながり絶えぬ瓜瓞」から今日まで、伝承文化が時代の波に没せられないまま伝わってきたことをいきいきと語っている。

（三） 宗教崇拝型

中国の宗教信仰は「天を敬い、祖にな法う」を主な特徴とし、特に天神崇拝、祖先崇拝と聖賢崇拝を主体とする。儒仏道の三家は闘争しあいながらも、滲透、吸収し合ってきて、儒を主とし、仏、道を輔とする中国伝統文化の基本

的な構造を形成してきた。このような背景において、中国の歴史上、宗法性の伝統宗教は往々にして政治、倫理と一体となり、厳格に区別しがたいものとなっている。

従って、各民族、各地区に伝わってきた出産を司る神も異なる要素の影響を受け、全部が全部同様ではない。以下に、出産を司る主な神を挙げてみる。

1. 子授け観音

仏教文化が中国歴史上で果たした役わりは二重的なものであった。仏教は「因果応報、臨回転生」などを講じて、消極的な働きをしてきたが、「愛人如己、種姓（出身）平等」などをも提唱したので、積極的な働きをもしてきた。観音は中国の仏教の四大菩薩の一つで、阿弥陀仏の左脇持、「西方三聖」の一つである。仏教は観音を大慈大悲で、人間の声を聞けばその苦しみを救う、荘厳な母性の女神として奉じてきた。このような観念は元代以前已に形成されていた。明代以後、仏教の四大名山の一つとなった普陀山は、もっぱら慈悲の化身である観音菩薩を祀る場所である。

江南から福建、広東、台湾まで、多くの人びと、特に婦人たちは子授け観音を信奉してきた。以前、各地の観音禅寺、観音楼、観音庵の参詣者は多くが婦人であった。江蘇、浙江あたりでは、旧暦の2月19日を観音の誕生日とし、この日に子授けを願うと、最も靈驗があるといわれてきた。婦人たちはよく観音庵に押し寄せ、線香を点して祈禱し、観音に長明灯の油を献納したり、長い幡を供えたりして、家の平安や子授けを願う。安徽の江淮地区では、旧暦の6月19日を「観音に願う」日とする。婦人たちは観音庵に集まり、線香を点し、ろうソクを点け、財物を喜捨して、観音に富を祈り、子授けを願う。ある地区では、子どもを欲しい婦人が観音寺に行き、祭壇上の蓮の灯あるいは仏座の下に置かれてある観音の刺繍の靴を盗むことがある。日本の千葉県では、子授け観音の寺から茶の道具を盗んでくれば、必ず子宝を得るといふ信仰がある。長野県でも観音に子授けを願う信仰や習俗があり、これ

ら中日の観音信仰は完全に共通性をもっている。この共通性は元々観音信仰の伝播に基づいたものである。

『扶桑略記』の記載によれば、梁武帝の普通3年（522年）に、中国の江南から日本に渡った漢族の居士司馬達らは初めて日本に仏教を伝えた。それより30年の後に、木彫の観音像が初めて朝鮮南部の百済国から日本にもたらされた。唐代に、日本に渡った観音菩薩はさらに多くなった。天宝13年（日本の天平勝宝6年）に高僧鑑真是揚州から千手観音一体を日本にもたらした。この観音像は平城京（今の奈良）の唐招提寺内に祀られ、広く崇拜されるようになった。その後、観音の祭りの日になるたびに、大勢の日本の漁民及び参詣者は礼拝のために中国の普陀山まで行くようになった。日本の那智山も普陀山と同様に、最大の観音菩薩の供養地となった。観音の信仰は次第にベトナム、ミャンマー、シンガポール、マレーシアなどの東南アジア諸国に伝わり、アメリカまで影響を及ぼした。それぞれ地区の子授けを願う習俗に関しては、今後の研究に期したい。

2. 碧霞元君と子孫娘々（子授けの女神達）

碧霞元君は黄河流域の最も権威のある女神で、「娘々」と称され、一般に東岳大帝の娘であると考えられ、宋代に天仙玉女碧霞元君として封ぜられるようになった。この女神の本山は泰山である。明代の泰山では、毎年祭りの日が来るたびに、廟の線香代はたいした収入であった。そのうえ子授けがかない願ほどきをする信者が、金銀で作った「子どもの人形」をしばしば廟に献納したりした。但し、北方各地の人々から、碧霞元君と子孫娘々とは、よく混同される。人々の移動にしたがって、この想像中の女神も黒竜江の齊齊哈^{チチハ}ルなど東北地方まで伝わっていった。碧霞元君は道教の要素が子授けの習俗に入った現れである。

3. 床公床母（ベッドの夫婦の神）

唐宋以来、宮廷でも民間でも、すべて「床公床母」という寝室を守護する神を信じてきた。新婚夫婦が寝室に入ったときはもとより、子授けを願ったり、子どもが生まれたり、子どもが病気になったりした場合や年末に、必ず寝室でこの神を祀って礼拝する。伝説によれば、『床公床母』は百人の息子を持っていた周文王夫婦であるという。

4. 鬼子母神

鬼子母神は仏教の「諸天」の一つで、本名は「訶利帝」，「歡喜」と訳す。「大唐西域記」（唐玄奘著）には、鬼子母に対して「祭りを以て嗣を求める」とある。この習俗はインドから伝来し、「九子母神」と称されることもある。ある地区では、この神に薄い餅^{ピン}を供えて子授けを願えば、よく靈驗があると言われる。南北朝及び唐宋の仏教の信者はよく神像を作ったり、写経したりして願ほどきをし、福を祈ったが、その頃作られた神像の中に鬼子母があったことから、その広く伝わったことが分かる。北宋時代に、九子母祠は多くあったが、宋代以後次第に少なくなった。

日本において、伝説によれば、鬼子母はもともと常に他人の子どもを奪い取る悪神だったが、仏教に帰依してから、児童の守護神となったという。多くの地区では、鬼子母を子授け、安産、とくに子どもを順調に成長させる守護神であると考えてきた。日蓮宗はこの神を非常に崇拝し、東京の豊島区雑司ヶ谷に「鬼子母」と命名された、専ら鬼子母神を祀る寺院がある。人々はよくこの寺院で願かけをする。私は神奈川県海老名市の妙常寺で調査したことがあるが、本良信典和尚の紹介によれば、この寺は1469年に建てられ、木製、彩色、慈善の姿の二体の鬼子母神を今までずっと祀ってきた。また紀元538年に仏教が日本に伝わってから、まもなく鬼子母神もついてきたらしいとも語った。さらに、神奈川県綾瀬市の大法寺にも、一体の高さ約30センチの鬼子母神がある。この寺の高野教充和尚の話では、この神像は彼が十数年前

に買ったものである。この二つの寺はいずれも日蓮宗に属するが、本良和尚の話では他の宗派の寺にも、たいてい鬼子母神が祀られているという。但し、その姿はまちまちで、青い顔とむきだした牙をもった、恐ろしげな悪鬼もあれば、上述の三体の神像のように早くに善神の姿になったものもあるという。

5. 子授けの張仙

前述のように、張仙は唯一の出産を司る男神である。彼は文昌星であるとも言われる。張仙の祭祀は四川に起こり、宋代以後次第に全国に伝わった。南方も北方も祭祀には大差がなく、一般に画像を祀り、木彫や泥で作った神像は少ない。北方の人は多く屋内で祀る。画像に描かれた張仙は、嬰兒を害する天の犬に向けて、弓を執って射ようとする姿である。彼の身のまわりには常に五人の男の子が描かれていて、子どもを送ってくることを意味する。

6. 金花娘々（女神さま）

金花娘々は金花夫人とも称され、華南の各省で信奉されてきた。広東には金花廟が至る所で見られ、毎年金花会が催される。旧暦4月17日はこの女神の誕生日で、この日に祭りを行くと、子どもが授かる、あるいは男の子が多く授かるという。

中国は広大な国であり、各地区で各民族の信奉してきた出産の神は多種多様である。例えば、台湾などの地区では、媽祖に子授けを願い、壮族は彼らの崇拝している「花王聖母」に子授けを願う。紙面に制限があって列挙できない。

（四）他 の 類 型

招福逐邪の心理的要素も、子授けの活動を構成する、もう一つの側面である。招福の方法として、通常同音字を利用し、象徴、借用などの手段も用い

る。

これは婚礼中にかなり典型的に体现される。

例えば、「伝袋」(「袋」と「代」は同音、代々継承するという意味)、新婦はかごを降りてから、地面を踏まずに、赤いカーペットや米の袋が一枚一枚と敷かれた道を歩く。

「吊篋」(「篋」と「快」は同音。篋は箸、快は早い¹⁰⁾の意)、一对の箸を吊しておく。早く子宝を得ることを願う。

「撒帳」、前述の如く、結婚の日に使う干した果物はたいてい子授けと関係のある発音のめでたいものを用いる。また今日でも、婚礼の時常にわざと花嫁と花婿に半生の餃子を食べさせる習俗がある。それから、「生ではないか」と皆に聞くと、皆が大声で「生」と答える。そうすると、子どもが生まれるめでたい兆しがもたらされるという。

「子孫饅々」(お菓子)を食べたり、「子孫桶」を送ったりする習俗は、こうした象徴的な行為を通して、子授けが実現するよう願うものである。

新婚夫婦のために、ふとんを敷いてあげる習俗は、一般に「全福」¹⁰⁾な婦人にたのむ。彼女たちはふとんを敷きながら、めでたい歌を歌う。例えば江蘇省金湖県では、ふとんを敷く時に、以下のような歌が歌われる。

「茂っている草が青い、刈り取った草が黄色い。新夫婦のためにふとんを敷いてあげる。両端を高々と敷いて、中間に子孫の池を作る。今年に子宝を得るように祈り、将来は必ず若い将元郎¹¹⁾となるよう祈る。」

結婚後長く子どものない者は産婦とズボンのベルトを換えると、子宝を得るめでたい兆しがもたらされるといわれる。これは日本の長野県にある多産の婦人から借りてきた帯を自分の身にまとして子授けを願う習俗と殆ど同様である。

「偷灯」(灯を盗む)、「搶灯」(灯を奪い取る)という子授けを願う習俗も普遍的なものである。例えば、四川省の東部では、正月15日の上元節に簷の下に吊された灯籠が常に盗まれる。「灯」は「丁」(男の子)の発音に近いので、

男の子が増えるという意味である。長く子どものない家は、土地神の誕生日と伝えられる2月2日に、赤い提灯のかけてある土地廟の前に行って灯籠を奪い取る。奪い取ったら、子宝を得る兆しとされる。「灯」と「登」とは同音なので、「灯」は「五子登科」(五人の子どもがそろって科挙試験に合格すること)を象徴すると解釈する人も¹²⁾いる。

北京などの地区で流行してきた「拴娃娃」(人形をつなぐ)とは、彩色の紐で神廟にある泥人形をつないで盗む習俗である。盗んできた泥人形を寝室に置き、名前をつけ、毎日菓子などを食べさせるようにすると、子宝が得られるといわれる。日本の長野県にある紙人形を抱いて寝て子授けを願うという習俗と似かよっている。

中国では、婚礼中に使われる衣服の生地、ふとんの表、^{とぼり}帳の上部にある模様や木の器、磁器にある模様はすべてめでたい図案にしなければならない。「文王百子図」などはその一例である。

もし女の子ばかりで、男の子が生まれないと、中国では常に女の子に招弟(弟を招く)、領弟(弟をつれてくる)、跟弟(弟がついてくる)、喚弟(弟を呼んでくる)、来子(子がくる)などの名前をつけることにより、男の子が授けられるように願う。文化大革命中、私は長城付近の延慶県の農村の中学校で教えたことがある。百人にも足りない女子生徒の中に、上述のような名前をつけられた者は少なくとも十人近くいた。悲しむべきことには、彼女たちが父母のために本当に弟をつれてきたことは少なかったのである。日本の群馬県にも、女の子にアグリと名づけたり、男の子の着物を着せたりすると男の子が生まれるという考えがある。これらの習俗はすべて一種の招福の心理に基づいたものである。

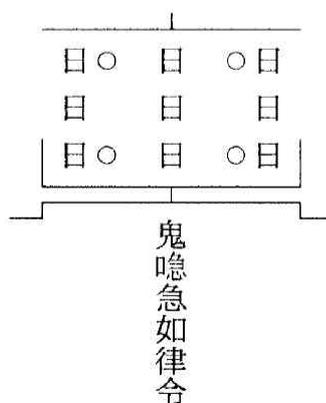
邪気を追い払い、子授け祈願をも留める習俗は主に祓禊(身のけがれを清めて災いを払うこと)の活動で表現される。古代、毎年3月3日の「上巳節」に、婦人たちは河で浴する祓禊の活動を行い、清水で身につきまとった不吉な悪魔や妊娠できない災いを洗い落とした。この活動は巫術や原始信仰

の遺風のような、虔誠、鄭重かつ神秘的な雰囲気を実現せず、水の中で遊びたわむれる娯楽的な要素をもっていたが、魚神に対する崇拝をも微かに含んでいて、魚神が彼女たちを水の中の魚と見なして子宝を賜ることを願った。日本の神奈川県にある、温泉浴をすれば子を得られるという信仰はこの祓禊と似ていると思われる。

祓禊と同一の認識に基づいて、婦人の不妊は邪が身につきまとったせいだという考え方は、中国の一部の地区では依然として存在し、かなり野蛮残酷なやり方さえある。江蘇省泰興県の一部の地区で行なわれる「棍棒で殴って子授けを願う」習俗はその一例である。毎年の正月15日の朝、結婚後二年たっても子どものない嫁は、大勢の人に家からひっぱり出され、棍棒で追われながら体中を殴られる。その嫁の夫が出てきて皆にタバコや飴などを配ると、大勢の人はやっと離れていく。そして、翌年になってもやはり子どもがないなら、その嫁は前年の倍以上も痛めつけられる。人々は愚昧にもこうすれば邪を追い払って子授けができると思うのである。

日本の富山県には、一種の魔よけの札がある。それを常に身につけておけば、子授けがかなうと思われている。これも邪悪なものが身につきまとわないように、邪を追い払い吉を求めるためである。

この魔よけの札の形状は以下のようなものである。



日本の千葉県などには、胎盤を跨いで子授けを願う習俗がある。そう信じるよりどころは何にあるのか、まだわからないが、類似の中国の例を挙げて

みよう。中国の江南地区では、産婦が子を生んだ後に胎盤を踏んでもらう習俗がある。すなわち、嬰兒の胎盤を瓦のかめに入れて密封し、夜更けに辻の入り口に埋めておく。人々は、胎盤が大勢の人に踏まれると、生まれた命が卑しいもので、今後災害や病気にあうことなく成長できると信じているのである。

以上、中国のさまざまな子授けの習俗についておおまかな分析と分類を行ない、あわせて日本の子授けの習俗と対比してみた。この中から言えることは、それぞれの子授けを願う習俗の形成は、みな非常に複雑な過程を経ており、それらの習俗は宗教信仰、経済方式、社会形態、民族心理、文化、価値観など多くの要素をとけ込ませてきたということだ。

そして、これらの要素は往々にして互いに浸透しあい、派生しあいつつ変化してきたので、一つの習俗の中に他の習俗の要素ももちあわせるという具合に、習俗と習俗との間に関連ができてきている。それゆえ、一部には簡単に一つの類型に帰することが難しくなった習俗さえある。例えば、中国の赫哲族^{ホジ}には巫師に太鼓を敲いてもらい子授けを願う習俗があるが、これをどの¹³⁾類型に帰すればよいか、まだ判断がつかない。しかし、これからも調査研究を続け、特に子授け祈願やその他出産に関わる習俗がさまざまな時代に異なる形態をとって出現してきたことに目をむけ、これを研究することにより、伝統的な観点やその変化を把握し、これによって問題の解決にあたりたいと思う。そしてさらに一歩進めて、中日文化交流における相互の影響を探究したいと願っている。

注釈

- 1) 『儀礼』喪服「七出者、無子、一也；淫佚、二也……」。
- 2) 劉黎明「飲食必以鼓考」『民間文学論壇』、1988年第3期。

- 3) 屈原『天問』。
- 4) 郭立誠『中国生育礼俗考』文史哲出版社，52頁。
- 5) 陶思炎「魚考」『民間文学論壇』，1985年第6期。
- 6) 曾騏「人面魚紋彩盆新解」『歴史大観園』，1990年第1期。
- 7) 王宇信「由『史記』鯀禹的失統談鯀禹伝説的史影」『歴史研究』，1989年第6期。
- 8) U. R. Burkardt, "Chinese creeds and Customs" I, 卷一, 165p.
- 9) 劉堯漢「中華民俗的原始瓢箪文化」，民族出版社出版『彝族社会歴史調査研究文集』，杉本信広「竹中生誕譚の源流」『史学』，第25卷2号。
- 10) 運命がよく，配偶，兄弟姉妹，息子息女がすべてそろっている完全に幸福な人を指す。民間では「全和人」という。「大全可人」とは，上述のような人がさらに上に父母，下に孫までおり，四世代が一軒の家に同居しているものをいう。
- 11) 『江蘇省民間文学集成資料選集』(一)76頁。
- 12) 「揚州風土小記」『郷土』報，1987年3期。
- 13) 凌純声『松花江下遊的赫哲族』。

参考資料

- 1) 柳田国男，橋浦泰雄『産育習俗語彙』国書刊行会
- 2) 吉村典子『お産と出会う』勁草書房
- 3) 大藤ゆき『児やらい』岩崎美術社
- 4) 張勁松等『古今育儿習俗』遼寧大学出版社
- 5) 陶思炎『中国求子習俗類型』